

2010.08
【第8号】



※ふるさとの会のメールマガジンをご愛読いただき、誠にありがとうございます。
今後もふるさとの会の活動内容を定期的に情報発信させていただきたいと存じます。

INDEX

- 1.シンポジウム「四重苦」を抱えた方々の支援と地域での新たな互助づくり(「絆」の再生)
- 2.隅田川花火大会&納涼祭
- 3.ヘルパーステーションふるさと・すみだ開設
- 4.大阪研修報告

1.シンポジウム「四重苦」を抱えた方々の支援と地域での新たな互助づくり(「絆」の再生)

ふるさとの会・支援付き住宅推進会議 共催シンポジウム2010

～ひとりになっても 認知症になっても 安心して地域のなかで暮らし続けたい～
「四重苦」を抱えた方々の支援と

『低所得・単身・高齢要介護・認知症などの障害』という生活困難の重複
地域での新たな互助づくり(「絆」の再生)

日 時: 2010年10月11日 (月・体育の日) 13:30開演

会 場: 在日本韓国YMCAアジア青少年センター(千代田区猿楽町)

資料代1,000円(終了後懇親会を予定)

開催挨拶 山岡 義典氏 支援付き住宅推進会議共同代表

パネルディスカッション

「ひとりになっても 認知症になっても 安心して地域のなかで暮らし続けたい」

- | | | |
|----------|---------|--|
| パネリスト | 栗田 圭一氏 | 東京都健康長寿医療センター自立促進と介護予防研究チーム 研究部長 |
| | 佐藤 幹夫氏 | フリージャーナリスト / 「ルポ高齢者医療-地域で支えるために」(岩波新書) 著者 |
| | 園田 眞理子氏 | 明治大学工学部建築学科 教授 |
| | 布川 日佐史氏 | 静岡大学人文学部 教授 |
| コーディネーター | 水田 恵 | 特定非営利活動法人すまい・まちづくり支援機構 代表理事 / 支援付き住宅推進会議共同代表 |
| 総括講演 | 高橋 紘士氏 | 国際医療福祉大学大学院教授 / 支援付き住宅推進会議共同代表 |
| | 主催 | 特定非営利活動法人自立支援センターふるさとの会
支援付き住宅推進会議 |

ふるさとの会主催シンポジウム2010開催要綱

～ひとりになっても 認知症になっても 安心して地域のなかで暮らし続けたい～
「四重苦」を抱えた方々の支援と地域での新たな互助づくり

【開催趣旨】

<四重苦>とは「低所得・単身・高齢要介護・認知症などの障害」という四つの生活困難を抱え常態化していることを象徴的に呼称しています。とりわけ認知症やがんを抱えた単身高齢者の地域居住が極めて困難な状態にあり、この問題を端的に示したのが、昨年3月の「静養ホームたまゆら」の火災事件であったと思います。

介護保険制度は実態としては家族が介護することを前提に運用され、従ってひとり暮らし高齢者や高齢者のみ世帯、また認知症の介護が支えられないという大きな課題があります。そのなかで「老老介護」「認認介護」や孤立した家族介護の限界を象徴する「介護心中」などが起きています。高齢者の夫婦世帯や、単身世帯が増加している現状にあり、「いつまでも住み慣れたまちで生活したい」という願いを持っています。高齢者が安心と安全に満たされた老後を送れる社会に向け、「不安」を払拭するだけでなく、地域で元気に老いてゆくにはどうしたらよいか。そのためには家族にかわって高齢者を地域のなかで支えてゆく「新たな互助」を軸にした地域包括支援体制づくりが求められていると思います。

元気な人も、高齢になれば生活支援が必要になる。そうなった時に、その地域で“支援が付く”という仕組みが重要な意味を持ちます。施設か在宅かという二者択一ではなく、いまある住まいを「支援付き」に変え、地域で生活を支える仕組みを創りだし、家族やお金がなくなっても地域で孤立せず最期まで暮らしてゆくことが出来る。いま住んでいる場所での生活を持続支援する地域での居場所づくりや訪問拠点としての「サポートセンター」。地域での単身生活継続が難しくなった場合や、病院等からの退院を迫られ地域での居住基盤を持ってないときニーズに即応する居住セーフティーネットとしての「支援付き共同住宅」（自立援助ホーム）。地域密着型の認知症グループホームや都市型軽費老人ホーム。このような資源を地域のなかに網の目のように張り巡らすことで、だれもが地域のなかで安心して暮らし続けることが出来るようにしてゆくことは可能だと考えています。

シンポジウムでは、地域ケアと居住資源が重層的なセーフティーネットを張るための仕組みと、地域の安心生活のために必要な制度の在り方をめぐる議論に、多くの方のご参加をお願いいたします。

【日 時】	2010年10月11日(月・体育の日) 13:30開演(13時開場)
【会 場】	在日本韓国YMCA アジア青少年センター(地図参照) 定員250名
【プログラム】	13:30 開演・主催者挨拶 山岡 義典 氏(支援付き住宅推進会議共同代表)
	13:35 来賓挨拶
	13:45 実践報告 ビデオメッセージ
	14:15 パネルディスカッション

「ひとりになっても 認知症になっても 安心して地域のなかで暮らし続けたい」

コーディネーター	水田 恵 氏(NPO法人すまい・まちづくり支援機構代表理事／支援付き住宅推進会議共同代表)
パネリスト	栗田 圭一 氏 東京都健康長寿医療センター自立促進と介護予防研究チーム研究部長 佐藤 幹夫 氏 フリージャーナリスト／「ルポ高齢者医療-地域で支えるために」(岩波新書)著者 園田 眞理子 氏 明治大学理工学部建築学科 教授 布川 日佐史 氏 静岡大学人文学部教授
総括講演	高橋 紘士 氏 国際医療福祉大学大学院教授
【参加費】	1,000円(終了後懇親会を予定)
【主 催】	特定非営利活動法人自立支援センターふるさと会／支援付き住宅推進会議
【連絡先】	特定非営利活動法人自立支援センターふるさと会事務局 TEL:03-3876-8150(担当:瀧脇・古木)

支援付き住宅推進会議名簿

【共同代表】	
高橋 紘士	国際医療福祉大学大学院教授兼医療福祉学部教授(福祉政策、介護保険論、地域ケア)
水田 恵	NPO 法人すまい・まちづくり支援機構 代表理事
山岡 義典	日本NPO センター代表理事／法政大学現代福祉学部教授(市民活動などを行う非営利組織の運営)
【会議参加者】	

栗田 主一	東京都健康長寿医療センター自立促進と介護予防研究チーム研究部長
石川 治江	NPO 法人ケア・センターやわらぎ 代表理事
井上 孝義	東京都社会福祉協議会医療部会MSW 分科会会長/(社福)信愛報恩会 信愛病院医療社会事業部 医療ソーシャルワーカー
大口 達也	立教大学大学院コミュニティ福祉学研究科博士後期課程・社会福祉士
尾上 義和	精神保健福祉士/藤沢市保健所
佐藤 幹夫	フリージャーナリスト/『ルポ高齢者医療』(岩波書店、2009年)著者
滝脇 憲	NPO 法人ふるさととの会理事/東京外国語大学非常勤講師
竹島 正	国立精神・神経センター精神保健研究所精神保健計画部長
中島 明子	和洋女子大学生活科学系教授(居住学、居住政策論、居住福祉論)
中山 徹	大阪府立大学人間社会学部教授(社会政策学)
仁科 伸子	法政大学大学院博士課程
橋本 理	関西大学社会学部准教授(企業論、非営利組織論、産業システムの創成)
林 泰義	NPO法人シーズ・市民活動を支える制度を作る会代表理事
原田由美子	京都女子大学家政学部准教授(介護福祉、高齢者福祉)
平山 洋介	神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授(住宅・都市計画)
布川日佐史	静岡大学人文学部教授(労働経済論)
福原 宏幸	大阪市立大学経済学部教授(労働経済論、社会政策)
本田 徹	浅草病院医師/認定NPO 法人シェア(国際保健協力市民の会)代表理事
的場 由木	保健師/保護司/NPO法人すまい・まちづくり支援機構理事
水内 俊雄	大阪市立大学大学院文学研究科教授・学長補佐(都市社会地理学、都市・地域史研究、国土開発研究、ホームレス問題、ハウジング研究)
宮谷 正子	練馬総合福祉事務所
米倉 克良	生活クラブ生活協同組合グループ市民セクター政策機構専務理事

2.隅田川花火大会&納涼祭

今年も7月31日の隅田川花火大会に合わせて納涼祭を開催しました。主に台東区や墨田区のアパートにお住まいの皆さんは墨田区向島にある「地域生活支援センターすみだ」に、台東区内にある当会の宿泊所等で生活されている皆さんはふるさとホテル三晃のテラスに集まりカラオケやスイカなどを楽しみました。それぞれで約60名の方にお越しいただいた他、ボランティアで介助を手伝っていただいた方なども含めて総勢150名が夏の風物を楽しみました。

ひたすらマイクを握りたがる方や遠くの花火を一人ぼんやりと眺めて物思いに耽る方など、過ごし方はそれぞれだったようです。ただ、夏の一大イベントに大勢で参加していることの安心感や哀愁漂う演歌の調べが多くの方を何か感慨深い思いにさせていたようでした。

参加者のTさん(60代)は、普段人を遠ざけているところがありますが、この日は多くの方に混じって静かにたたずんでいました。何十年もこの花火大会を見続けてきたOさんもやはりどこか神妙な面持ちのようでした。また、A子さん(20代)は大勢のお年寄りに囲まれて最初はモジモジしていたようですが、いつの間にかSMAPの歌を何曲も楽しそうに熱唱していました。Mさん(60代)は、「隅田川花火大会は毎年楽しみにしている。今年の今頃は何をしていたか振り返るきっかけになる。」と話されていました。年に一度開催される隅田川花火大会は、皆さんそれぞれの思いが詰まったイベントであるようです。

慌ただしく過ぎる日々の生活が一瞬止まったような安らぎに包まれたひと時でした。
(甲野順)





3.ヘルパーステーションふるさと・すみだ開設

7月1日、2つ目の介護支援事業所を墨田区京島に開設しました。当会では2001年から台東区にて介護支援事業所を運営し、台東区を中心とした介護支援を行ってきました。既に墨田区にお住まいの利用者も多く、今回墨田区に新たな拠点を持つことでより地域に根ざした介護支援ができるようになりました。

事業所は墨田区内でも大きな規模を誇る商店街である「キラキラ橋商店街」に位置しており、特に日中は多くの買物客で賑わっており、事業所内も花が飾ってあったり、音楽が流れていたりするなど、明るく落ち着いた雰囲気があり、実際に介護サービスを利用されている方が買物途中に顔を出していただけられることもあるようです。建物の立地や事務所の雰囲気などから気軽に来所していただける環境が整っていると感じました。そのため日々のちょっとした心配事を相談でき、介護事業所としてもより充実したケアにつなげていけると思います。また、単に介護だけを提供するのではなく地域の安心につながる役割を担っていけるのではないかと期待されます。

現在の様子や今後の展望について事業所責任者の川崎ケアマネージャーにお話を伺いました。「現在のサービス利用者は約50名で、その大半が当会の自立援助ホームに入居されており、単身・高齢で障害を抱え、介護を必要とされる方です。“他人の世話になるのは嫌だ”とヘルパーさんを毛嫌いされる高齢者にとっても、普段から周りの方々の介助をしている見慣れたヘルパーさんが多いので「あの人なら」と安心される方も少なくないようです。メンタル面で困難を抱えた人など、人と馴染むのに時間がかかる方にとってもよいことです。今後については、地域で在宅生活されている方々がそのまま住み慣れたところで生活し続けられるように支援していくことを目指しています。」

また、ヘルパーさんは次のような話をされていました。「以前一時的に仕事から離れていた期間があり、その後復帰したところ、利用者の多くが心配してくれていたそうです。自分が心配しているだけでなく、利用者からそう思われていたことを知り、この仕事の大切さを感じました。」

私自身も在宅支援に携わり地域の高齢者宅を訪問する中で、皆さんが日々様々な不安を抱えていることを強く感じています。介護の心配だけではなく、独居で生活することの不安も多くの方に共通しています。そうした日常生活の不安に寄り添いながら安心して生活できるための環境作りを少しずつでも進めていけたらと思いました。(岡川 明祥)



4.大阪研修報告

8月6日から3日間の日程で大阪研修に参加しました。当会に入って3年未満の職員を対象としたもので、研修テーマは日本最大の寄せ場である釜ヶ崎周辺とそこに生活する人たちへの支援を学び、日頃の各自の支援に反映させることでした。研修を通じて心に残ったことをいくつかご報告します。

釜ヶ崎付近の散策

初日は大阪についた直後、釜ヶ崎近辺の散策からはじまりました。「新世界は浅草の六区」、「天王寺動物園付

近は上野公園、「飛田新地は吉原」というように都市空間の形成は山谷周辺とよく似ているということでした。飛田新地(旧飛田遊郭)では、夕闇に浮かぶ整然とした看板や提灯などがあり、時代を飛び越えてしまったような錯覚に陥ったものでした。釜ヶ崎の印象は、まず広いというもの。西成の労働福祉センターなどは、巨大な市場を彷彿とさせるようなものでした。

山谷は福祉のまちになっていっている印象がありますが、釜ヶ崎には力強さと活気を感じました。西成警察署前では、まさに警察と労働者と思しき中年男性のもめごとが目の前で繰り広げられ、怒声も飛び交い騒然となっていました。

大淀寮(更生施設)

大正時代に建てられた大阪市長柄宿泊所が前身というだけあり、古い歴史のある学校のような佇まいの施設です。社会福祉法人みおつくし福祉会が運営しており、2010年4月時点での利用状況は次のとおりです。入所者数は143名(内外部就労者46名、寮内作業従事者29名)、退寮したOB対象の通所事業利用者は245名。最近の入所者の傾向としては、既存の福祉施設や施策では十分に対応できない困難要素(知的障害や精神障害など)を抱えた方や若年層が増加していることだそうです。現在最も力を入れているのが地域との関係作りであり、地域のお年寄りへの配食サービスや地域住民にも利用してもらえる喫茶ボランティア「くつろぎ亭」を運営しています。配食サービスに使っていた三輪自転車は「特注」ということでしたが使い勝手がよさそうでした。

就労支援施設・希望館

私自身が就労支援を担当していることもあり、45歳以下の稼働層の方々を支援しているこの施設には特に興味がわきました。「希望館」は職員が務める事務所近くに開設したアパート1棟とシェアハウス2ユニットです。入所面談時に金銭管理をはじめとする生活上の規約を書面にて明確にしていることが利用者の安心につながっていると感じました。職員が常駐する談話室にシャワーと洗濯機があり、入所して間もない利用者と職員が自然に接することができるので大変良いことだと思います。また、仕事がない日でも職員と利用者が朝話す機会を設けるなど、生活リズムが崩れないような工夫をしています。

ウエルフェアマンション“おはな”

ハワイの言葉で「家族・仲間」という意味の「おはな」は2000年開業の“共同住宅”です。24時間見守りつきで、生活相談・支援も行っています。西口代表の言葉で印象的だったのは、地域との関係・連携に力を注いでいることです。それは利用者が「このまちの住民として生きる」ための手伝いとしているからだと言い、その実践として近隣の保育園の運動会の準備を利用者が行い、競技にも参加しています。それにより利用者自身がまちの住民としての自覚や誇りを持ち、「立ち小便なんかできなくなるんです」(西口代表)。この話からは、まちに生きるひととひとが顔の見える関係を作る素晴らしさを感じました。



大阪希望館沖野事務局次長



街角に目立つ被保護者向け住宅の看板



大淀寮「くつろぎ亭」



おはな

最後に

今回の研修では、各団体のきめ細やかな支援が勉強になりました。また、高度成長期に寄せ場が政策上どのような役割を担っていたのかをはっきり認識することが出来ました。今回の研修で見、そして感じたことを少しでも今後の自分の仕事にいかしていけたらなと思いました。

(鈴木宏仁)

発行元: 特定非営利活動法人 自立支援センターふるさとの会
〒111-0031 東京都台東区千束4-39-6
TEL: 03-3876-8150 FAX: 03-3876-7950
E-mail: hurusato@d5.dion.ne.jp
HTML: <http://www.d5.dion.ne.jp/~hurusato/>